

源氏物語卷別古注釈集成 第35帖若菜下 十三

國學院大學物語文学研究会

林<sup>はやし</sup> 田<sup>だ</sup> 孝<sup>たか</sup> 和<sup>かず</sup>

(本学副学長)

福<sup>ふく</sup> 嶋<sup>しま</sup> 健<sup>けん</sup> 一<sup>いち</sup>

(鶴見大学附属中学校・高等学校教諭)

大<sup>おお</sup> 槻<sup>つき</sup> 雪<sup>ゆき</sup> 乃<sup>の</sup>

(本学三十五期生、國學院大學大学院博士課程前期了)



37、源氏、女三の宮と玉鬘との人柄を比較、宮の幼さを思う。 大系三卷三九九頁一〇行―四〇一頁一行

大成二卷二二〇二頁六行、別本集成九卷三八〇頁三行、吉沢新釈4卷97頁、全書4卷20頁、玉上評釈7卷44頁、全集4卷249頁、今泉現代語訳6巻186頁、  
集成5巻239頁、完訳6巻207頁・訳362頁、新大系3巻389頁、新編全集4巻239頁

宮は、いとらうたげにて、惱み渡り給ふさまの、なほ、いと心苦しく、かく思ひ放ち給ふにつけては、あやにくに、憂きに紛れぬ戀しさ  
の、苦しき思さるれば、わたり給ひて、見たてまつり給ふにつけても、胸いたく、いとほしくおぼさる。御祈りなど、さまぐにせさせ  
給ふ。大方のことは、ありしに變らず、なか／＼いたはしく、やむごとなくもてなし聞ゆるさまを、増し給ふ。けぢかくうち語らひ聞え給  
ふさまは、いとよなく、御心隔たりて、かたはらいたければ、人目ばかりを、めやすくもてなして、思しのみ亂るゝに、この御心の内し  
もぞ、苦しかりける。「さること見き」とも、あらはし聞え給はぬに、みづから、いとわりなく思したるさまも、心をさなし。「いと、か  
くおはするげぞかし。『よきやう』と言ひながら、あまり、心もとなくおくれたる、頼もしげなきわざなり」とおぼすに、世(の)中、なべ  
て後めたく、「女御の、あまりやはらかにおびれ給へるこそ。かやうに、心かけ聞えむ人は、まして、心亂れなんかし。女は、かう、晴る  
け所なくなよびたるを、人も、あなづらはしきにや。さるまじきに、ふと目とまり、心強からぬ遇ちは、し出づるなりけり」と、おぼす。  
「右のおとゝの北の方の、とり立てたる後見もなく、幼くより、ものはかなき世に、さすらふるやうにて、生ひ出で給ひけれど、かど／＼  
しく、勞ありて、我も、大かたには親めきしかど、憎き心のそはぬにしもあらざりしを。なだらかに、つれなくもてなして過ぐし、このお  
とゝの、さる無心の女房に心合はせて、いり來たりけむにも、けざやかにもて離れたるさまを、人にも見え知られ、ことさらに許されたる  
有様にしなして、わが心と、罪あるには、なさずなりにし」など、いま思へば、いかに、かどある事なりけり。契(り)深き中なりければ、  
長く、かくて保たんことは、とてもかくても同じごと、あらまし物から、「心もてありしこと」とも、世(の)人も思ひ出では、すこし輕  
く／＼しき思ひ、加はりなまし。「いといたく、もてなしてしわざなり」と、おぼし出づ。

④ 宮は、いとらうたげにて、

一葉抄

宮はいとらうらけにて

双婚の地也

孟津抄

宮はいとらうらけにて

女三也

湖月抄

宮はいとらうらけにて、  
〔孟孟三三〕

源氏物語新釈

宮はいとらうたげにて

女三

② なほ、いと心苦しく、

湖月抄

猶いと心くるしく、  
源氏の御心

源氏物語新釈

なほいと心くるしく

源の

④ かく思ひ放ち給ふにつけては、

弄花抄

かくおもひハなち給につけてハ

源しの女三宮をおもひハなちて又

あやにくに恋しくてわたり給也

孟津抄

かく思はなち給につけては

源の女三を思はなちて又あやにくに恋

しくてわたり給也 かやうのことあるにつけて又恋しきと也

岷江入楚

かくおもひはなち給ふにつけては 源の女三宮へは再会あらしとお

ほす也〔首注〕「弄 源氏の・の女三を思ひはなちて又あやにくに恋しくて

わたり給ふと也」

湖月抄

かく思ひはなち給ふに

⑤ 源の女三を思ひはなちても、又あやにく

に恋しくてわたり給ふ也〔晬〕。

源氏物語新釈

かくおもひはなち給ふに

源の女三をおもひはなちても又あやにく

に恋しくてわたり給ふなり

④ あやにくに、憂きに紛れぬ戀しさの、苦しく思さるれば、

花鳥余情

うきにまきれぬ戀しさの

① 戀しさのうきにまきる、物ならば又二度

と君をみましや物語より後の歌なり不可爲「證歌」なり

一葉抄

あやにくに 源氏の御心

細流抄

あやにくにうきにまきれぬ

源のわたり給へる也花鳥引哥おもしろし

孟津抄

うきにまきれぬ恋しさのくるしくおほさるれば

恋しさのうきにま

きる、物ならば又二たひと君を見ましや大武三位 物語より後の哥

也不可為証哥也\*

岷江入楚

うきにまされぬ 花恋しさのうきにまざる、物ならば又二たひと君

をみまじや 物語より後の哥也 不可為証哥 必源のわたり給へる

也 花鳥・引哥おもしろし

湖月抄

あやにくにうきにまされぬ 源渡り給へる也。花鳥引歌おもしろし。

ろし。㊦「戀しさのうきにまざる物ならば、又ふたたびと君を見

まじや」(大貳三位) 物語より後の歌也。不可為「證歌」也。

源氏物語新釈

あやにくにうきに紛れぬ 或説 大貳三位八(金後道・七九三)こひしさのうきにまき

る、物ならば又ふた、ひと君をみまじやとよめるは此物語より後

の哥也、古き哥有か考へしといへり

㊧ わたり給ひて、見たてまつり給ふにつけても、胸いたく、

孟津抄

わたり給ひて見奉り給につけてもむねいたく 源也

湖月抄

むねいたく五五四

いとほしく

源氏物語新釈

いたはしく いとほしくともし語也

㊨ やむごとなくもてなし聞ゆるさまを、増し給ふ。

孟津抄

やむごとなくもてなしきこゆるさまをまし給 女三の御煩に付て面

向は不相替源のし給さまをまし給とは勝也すくれての心也

岷江入楚

やんことなく 箋是は面むきを前よりもねんころにし給ふ也

湖月抄

やむごとなく三三(金後道・七九三)

源氏物語新釈

やんことなく 是はおもてむきを前より懇にし給ふ也

㊩ けちかくうち語らひ聞え

岷江入楚

けちかくうちかたらひ 箋文を見つけ給て後は女三と実事なき歟

湖月抄

けちかくうちかたらひきこえ 【三】文を見付給ひて後は、女三と

實事などはなき歟。

源氏物語新釈

けちかくうちかたらひきこえ 文を見付給ひて後は女三と御ともね

はなきとみゆ

㊪ 思しのみ亂るゝに、この御心の内しもぞ、

一葉抄

此御心のうちに 女三宮の御事也源氏のあらはし給ハぬをいとく  
るしくおもひ給也

岷江入楚

おほしのみみたる、この御心のうち 美女三の御心の中也 聞これ  
は草子の地云々

湖月抄

源の心  
おほしのみみたるに、  
「三宮の御心あり也位位草子抄云々」  
この御心のうち

源氏物語新釈

おほしのみみたる、に 源の  
この御こゝろのうちしもぞ 女三の

④「さること見き」とも、あらはし

岷江入楚

さる事みきとあらはし 簾柏の文の事也 源の心也

湖月抄

「三宮の文の事也」  
さることみきとも

源氏物語新釈

さる事みきとも 柏の文  
④みづから、いとわりなく思したるさまも、

細流抄

みづからいとわりなく 女二宮也

岷江入楚

みづからいとわりなく 女三の我と人の不審するやうなる跡をあら  
はし給ふ事也

湖月抄

みづからいとわりなくおほしたるさまも 女三の有さま尤もかくあ  
るべし。④女三の我と人の不審するやうなる跡をあらはし給ふ事  
也。

「目女三宮」  
みづから

源氏物語新釈

みづから 女三宮  
心をさなし。「いと、かくおはするけぞかし。」

岷江入楚

心おさなしかくおはするけぞかし 簾如こおはする故に此事なども  
出来ぬると也

湖月抄

かくおはするけぞかし 【三】如こおはする故に、此事なども出  
来ぬると也。  
「源の心也」  
いとかくおはするけぞかし、

④『よきやう』と言ひながら、

孟津抄

よきやうといひながら 心うつくしけなれとも餘にゆるへたるもわ

ろしと也

湖月抄

上段はたやうなまほしとひなかりの心也  
よきやうといひながら、

源氏物語新釈

よきやうといひながら 前にも出たる大とかなる也

④「女御の、あまりやはらかにおひれ給へるこそ。」

河海抄

女御のあまりやはらかにをひれ給へるこそ をひれはおさなき心也

ねをひれなどやう也

弄花抄

女御のあまりやはらかに 明石の女御事を源しのおもひ給心

細流抄

女御 明石の女御也

孟津抄

女御のあまりやはらかに 明姫也

おひれ給へる おさなき心ねをおひれ心と也

岷江入楚

女御のあまりやはらかに 必明石女御也 弄明石女御の事を源氏の

思ひ給ふ心 兼明石女御大とかにやはらかなる人ときこえたりをひ

れ給へるこそ 河をひれはおさなき心也 ねをひれなどやう也

湖月抄

おひれ給へるこそ ⑤おひれは、をさなき心也。ねおひれなどや

う也。【三】明石女御、大とかに、やはらかなる人ときこえたり。

⑤明石女御也  
女御

源氏物語新釈

女御のあまり 明石

⑥おひれ給へるこそ 是も大とかといふを彌略きたる語なるへし

かやうに、心かけ

岷江入楚

かやうに心かけ 物やはらかなる人は心かけそめたる人のとり入や

すくてしかも思ひはなれかたき物そと也

湖月抄

⑥物やはかなる人は人の取り入り安くしかも思ひ難れかたき物也と也  
かやうにこころかけ

⑦人も、あなづらはしきにや。

湖月抄

人もあなづらはしきにや なびくべき女と見こすからに、さるまじ

くおほけなきにもめとどめ、女も心つよからでかやうのあやまちは

あると也。

源氏物語新釈

人もあなづらはしきにや なひくへき女と見こすからに、さるま

しくおほけなきにも、めと、め女も心つよからでかやうのあやまちは

はあるとなり

「右のおとゝの北の方の、とり立てたる後見もなく、

花鳥余情

右のおとゝのきたかたのとりたてたるうしろみもなく 此下の一段

は玉かつらの鬚黒の大將にあひそめし時のことなり

一葉抄

右のおとゝの北方 玉かつらの事

弄花抄

右のおとゝの北方 玉かつらの事

細流抄

右のおとゝの北のかた 玉かつら也

孟津抄

右のおとゝの北方 此下の一段は玉鬘の鬚黒大將にあひそめし時の

事也源詞也

岷江入楚

右のおとゝの北のかた 必玉かつら<sup>(世)</sup>

湖月抄

右のおとゝの北の方の、  
(世)玉かつら也孟津抄下の一段玉鬘の鬚黒大將にあひそめし時の事也

源氏物語新釈

右のおとゝの北方の 玉かつら

ものはかなき世に、さすらふるやうにて、生ひ出で給ひけれど、

湖月抄

つしにそらあひし事也  
ものはかなきよに さすらふるやうにておひいで給ひけれど、  
かどくしく、勞ありて、我も、大かたには

孟津抄

かどくしくらうありて我大かたには 源詞也

岷江入楚

かどくしう 羹心のはたとよき所ある也

源氏物語新釈

らうありて 臘

憎き心のそはぬにしもあらざりしを。

孟津抄

にくき心のそはぬにしもあらざりしを 源詞也玉に源の心をかけし

をと也

岷江入楚

にくき心のそはぬにしも 源の心をかけ給ひし事を我と思ひ給ふ也

されともつゝに實事はなしとみゆ

湖月抄

にくき心のそはぬにしもあらざりし 玉かつらに源氏の心をか

けし事也。されども終に實事はなしと見ゆ。

源氏物語新釈

にくき心の 源自らの給ふ

このおとゝの、さる無心の女房に心合はせて、



紫明抄

むしんの女房に心あはせて 無心

河海抄

むしんの女房に心あはせて 無心

一葉抄

このおと、 ひけくろ

むしんの 弁のおもとの事

弄花抄

このおと、の ひけくろ

むしんの女房 弁也

細流抄

むしんの女房 小弁をいへり

孟津抄

このおと、のさるむしんの女はうに 鬻黒也 無尽の女房にとは種

と心をつくして弁にいひ侍る

岷江入楚

此おと、の 弄ひけくろ 此一段玉かつらの鬻黒に逢そめし時の事

也

むしんの女房 河無心 必小弁をいへり弄

湖月抄

このおとどの、

〔目〕小弁をいへり  
むしんの女房

源氏物語新釈

このおと、の ひけ黒

むしん 無心

女房に 小辨

〔註〕ことさらに許されたる有様にしなして、

岷江入楚

ことさらにゆるされ 玉かつらの我とはなひかぬ所をあらはしてか

らゆるされて逢給ひし也

湖月抄

〔註〕玉かつらの我とはなひかぬ所をあらはして許されてから逢ひ給ひし也  
ことさらにゆるされたる有様にしなして、

源氏物語新釈

ことさらに 玉かつらの我とはなひかす

ゆるされたる 源より

〔註〕いま思へば、いかに、かどある事なりけり。

一葉抄

いかにかとある事なりけり 此てにハ前にしるしぬ

岷江入楚

今おもへば 美女の御事から思ひくらへて源のおほす也

湖月抄

いかにかどあることなりけり 〔註〕此てにをはの事、拾遺にいへる、

さること也。ただし是は、別に一種のいひざまにて、例有<sup>ル</sup>こと也。  
いかに、俗にいかにばかりかといふ意也。

(※『拾遺』の記事未確認)

源注拾遺

いまおもへばいかにかとあることなりけり 今案いかにといひてけり  
りとと、めたるてには心得がたしいかにもといへはかなへばその  
心とみるべき歟いづくの露のかゝる袖なりのたくひか

源氏物語玉の小櫛

いかにかどあることなりけり九十のひら 此てにをはの事拾遺にい  
へる、さること也、たゞし是は、別に一種のいひざまにて、例有<sup>ル</sup>  
と也、いかに、俗にいかにばかりかといふ意也、

契<sup>④</sup>(り) 深き中なりければ、

弄花抄

契りふかき中なりけれハ ひけくると玉かつらのちきりふかき中な  
れと玉かつらの心とつけたまふともさらすともおなし事にて有へけ  
れと人／＼のゆるしたまふハぬ事ならはうたてからましと也

細流抄

契深き中なりければ 鬚黒と玉かつらとのちきりふかき中なれば玉  
かつらのととけ給ふともさらすとも同事にてあるへけれと人のゆる  
さぬ事ならはうたてあらましと也

孟津抄

ちきりふかき中なれば 鬚と玉との契ふかき中なれば玉の心ととけ  
給ともさらすとも同じことにて有へけれと人／＼のゆるし給はぬこ  
とならほうたてからまし也

岷江入楚

契りふかき中なりければ 必鬚黒と玉かつらとの契ふかき中なれば  
玉かつらの心ととけ給ふとも又さらすとも同事にて有へけれと人の  
ゆるさぬ事ならはうたてからましと也弄箋聞 私此段玉かつらの心  
をほめ給ふ也

湖月抄

ちぎりふかき中なりければ 鬚黒と玉かつらとの契りふかき中  
なれば、玉かつらの心とけ給ふとも、又さらすとも同事にて有るべ  
けれど、人のゆるさぬ事ならば、うたてあらましと也。此段玉  
かつらの心をほめ給ふ也。

源氏物語新釈

契ふかき中なりければ 鬚黒と玉鬘と契深き中なれば、玉かつらの  
心と、け給ふとも又さらすとも同事にて有へけれと、人のゆるさぬ  
事ならはうたてあらましと也

とてもかくても

源氏物語新釈

とてもかくても 玉の心にはかなひかなはずとも

世(の)人も思ひ出て すこし輕／＼しき思ひ、加はりなまし。

孟津抄

すこしかろくしき思ひくは、りなまし 玉のかるくしは今も

人のいはむにと也

湖月抄

世の人も思ひいでば玉玉の心かろくしは今もいはんそと也

源氏物語新釈

よの人も思ひいて 玉かつらのかろくしは今も人のいはんそと

也

「いといたくもてなしてしわざなり」と、

弄花抄

いといたくもてなして 玉かつらの心

### 37、補足資料

〈1〉④

『後拾遺集』第十四恋四、七九二番歌、新編国歌大観2、128頁

堀川右大臣のもとにつかはしける 大式三位

こひしさのうきにまぎるるものならばまたふたたびときみをみましや

〈2〉②

『源氏物語』「若菜下」大系(3) 375、376頁

第25章段、本文参照、当該部分抄出

細流抄

いといたくもてなして 玉かつらの心也

孟津抄

いといたくもてなしてしわざなりと 玉の心中をほめ給也

岷江入楚

いといたくもてなしてし 必玉かつらの心を云弄

湖月抄

いといたくもてなしてし玉玉の心かろくしは今もいはんそと也

源氏物語新釈

いといたくもてなしてし 玉のいと心つかひせしを云

たゞ、明けに明(け)行(く)に、いと、心あわたゞしくて、

柏「あはれなる夢語りも、きこえさすべきを。かく、憎ませ給へばこ(前をさせ給)

そ。さりと、いま、思し合はする事も侍りなむ」

とて、のどかならず立ち出づる明けぐれ、秋の空よりも、心づくしなり。

柏おきて行(く)空も知られぬ明けぐれに、いづくの露のか、る袖なり(前を)

と、ひき出で、うれへ聞ゆれば、いでなむとするに、すこし慰め給ひて、

女三あけぐれの空に憂(き)身は消えな、ん夢なりけりと見てもやむべく(前を)

と、はかなげにの給ふ聲の、若く、おかしげなるを、聞きさすやうに、出でぬる、たましひは、ま事に、身を離れて、とまりぬる心ちす。

(第37章段担当、二年、小松尚子、平成五年六月十一日発表)

(補訂者、福嶋健一、平成二十年十二月)

38、朧月夜尚侍、出家する。源氏と尚侍、和歌を贈答 大系三卷四〇一頁二行〜四〇二頁六行

大成二卷二二〇三頁一四行、別本集成九卷三八八頁二行、吉沢新釈4卷99頁、全書4卷203頁、玉上評釈7卷467頁、全集4卷252頁、今泉現代語訳6卷

187頁、集成5卷241頁、完訳6卷209頁・訳363頁、新大系3卷390頁、新編全集4卷261頁

① 二條の内侍のかむの君をば、なほ絶えず、思ひいで聞え給へど、かく後めたきすぢのこと、憂き物におほし知りて、かの御心弱さも、すこしかるく思ひなされ給ひけり。「つひに、御本意の事、し給ひてけり」と、聞き給ひては、いとあはれに、口惜しく、御心うごきて、まづ、とぶらひ聞え給ふ。「いまなむ」とだに、匂はし給はざりけるつらさを、浅からずきこえ給ふ。

源文「あまの世をよそに聞かめや須磨の浦に藻鹽たれしも誰ならなくに

さまぐなる、世の定めなさを、心に思ひつめて、今までおくれ聞えぬる口惜しさを。「おほし捨てつとも、さがたき御回向の中には、まづこそは」など、あはれになむ」

など、多くきこえ給へり。とく、おほし立ちにしことなれど、この御妨げにかゝづらひて、人には、しかあらはし給はぬ事なれど、心のうちあはれに、昔よりつらき御契(り)を、「さすがに、浅くしも思し知られぬ」など、方々におほし出でらる。御返(り)、「今は、かくしも通ふまじき御文のとちめ」と思せば、あはれにて、心とめて書き給ふ。墨つきなど、いとをかし。

臘文「常なき世とは、身一つのみ知り侍りにしを、「おくれぬ」とのたまはせたるになむ、げに、

あま舟にいかゞは思ひおくれけん明石の浦にいさりせし君

回向には、あまねき方にても、いかに

とあり。濃き青鈍の紙にて、襜にさしたまへる、例のことなれど、いたく過ぐしたる筆づかひ、なほふりがたく、をかしげなり。二條院におはしますほどにて、女君にも、今は、むげに絶えぬることにて、みせたてまつり給ふ。

① 二條の内侍のかむの君をば、

花鳥余情

二條の内侍のかんの君をば 是よりは朧月夜のことかの御心よはさ

もは女三宮の事なりつゝに御ほいのことはないしのかんの君の尼に

なり給へることなり

一葉抄

二條の内侍 朧月夜事

弄花抄

二條の内侍のかんの君をハ 朧月夜事

細流抄

二條の内侍 朧月夜也

孟津抄

二條の内侍のかんの君をば 是よりは朧月夜のこと也

岷江入楚

二條の内侍のかんの君 必おほろ月夜事弄花抄鳥

湖月抄

二條のないしのかんの君をば、

源氏物語新釈

二條のないしのかんの君 朧月夜

② かく後ろめたきすぢのこと、

孟津抄

かくうしろめたきすぢのこと 女三心につきて朧月のことを思知給

也

岷江入楚

かくうしろめたきすぢの事 女三の事故に源のおもひしり給ふ也

湖月抄

かくうしろめたきすぢのこと、

源氏物語新釈

かくうしろめたき 女三

③ かの御心弱さも、すこしかるく

岷江入楚

かの御心よはさもすこしかるく 花女三②・宮の事也 養女三の宮の

御事ゆへ朧月夜の心よはさもかるくしき事とすこし思ひさまし給

へる心也

湖月抄

かの御心よはさもすこし 【三】女三の御事故、朧月夜の心よわさも、

かるがるしき事と、少し思ひさまし給へる心也。

④ 「つひに、御本意の事、し給ひてけり」

一葉抄

つゝに御ほいのことく 朧出家事

弄花抄

つゝに御ほいの事 朧月よ出家事

細流抄

つゐに御ほい 臘月夜は出家し給へり

孟津抄

つゐに御ほいのごとし給てけり 臘月の出家也

眠江入楚

つゐに御ほいのごとし 花内侍のかんの君尼になり給へる事也必弄

私ほいのごと如<sup>(二)</sup>也又ほいのご<sup>(二)</sup>と事也いつれに欺猶ほいのご

とくといへる然へき欺如何

湖月抄

つひに御ほいのごとし給ひてけり

源氏物語新釈

つひに御ほいのごとし 此ほと既に臘月夜入道し給ふ也

聞き給ひては、

眠江入楚

き、給ひては 源のすこし思ひさまし給ひつれとも出家のよし

き、てはあはれにて今一たひもとおほすなるへし

御心うごきて、

湖月抄

御心うごきて、

源氏物語新釈

御心うごきて 源の猶はなれぬ御心なれば

⑦「いまなむ」とだに、匂はし給はざりける

細流抄

いまなんと 案内もなかりし也

孟津抄

いまなんとたにほはし給はざりける 尼のことを源へ不被申也

眠江入楚

いまなんとも 必案内もなかりし也

湖月抄

いまなんとだにほはし給はざりける

源氏物語新釈

今なんとたに 入道し給ふことを

⑧「あまの世をよそに聞かめや須磨の浦に藻鹽たれしも誰ならなくに

一葉抄

あまの世をよそにきかめや あまの世ハ世をそむくよし也よそにき

かめやとハ源氏の御道心を望<sup>(二)</sup>ある也もしほたれしもとハあまの世を

海辺によせて我こそあまの世をもしるへき身なれと也世をそむくへ

き身ハ我そといふ心也かくいふうちに臈ゆへにしつミしいにしへの

事こもるへし

弄花抄

あまの世をよ所にきかめや 臘月よの尼に成たまふをも源しのよ所

にきかん事かハすまへの事も誰ゆへかよミ給

細流抄

あまのよを 此尼になり給へるをもよそにはきくましきと也我身す  
まのうつろひもそなた故なれはと也

孟津抄

あまのよをよそにきかめやすまの浦にもしほたれしも誰ならなくに  
臈の尼に成給ふをも源のよ所にきむことかはすまへのも誰故そ  
とよみ給也すまへのもそなた故なれはひとつに出家せんするも  
のをとの心也

岷江入楚

源氏  
あまの世をよそにきかめやすまの浦にもしほたれしも誰ならなくに  
必此臈月尼に成給ふをも源のよ所にきくましき也わか身すまのうつ  
ろひもそなた故なれはと也弄 羹尼海人ヲカル誰ゆへそと云結句也

湖月抄

あまの世を ⑧此尼になり給へるをもよそには聞くましき也。我  
身すまのうつろひもそなた故なればなり。⑨同。すまへの事もそ  
なた故なれば、ひとつに出家せんずる物をと也。【愚按】臈月夜ゆ  
ゑに、須磨にさすらへしも誰ならず、我にてあれば、道心にもおく  
れ申すまじき物をとの心也。尼になり給へるを、ふかくしたひうら  
める心こもれり。

源氏物語新釈

源あまのよを 前にすまのうら人となりしも、そこ故なれは今あまと

成給ふ共我にきかせ給ふへき物を、見捨られしかうらめしきと也、

さて詞に今までおくれぬると有はわれもとく入道すべき身なりしを  
とかねて本意をの給ふなれと、右の哥には先かの聞え給はぬうらみ  
をよみ給ふ也

すまのうらに 源より臈への文の詞也

⑩さまぐなる、世の定めなさを、

岷江入楚

さまぐなる世のうさを 源より臈への文の詞

湖月抄

源氏  
さまざまなる世のさだめなさを、

⑪心に思ひつめて、

岷江入楚

心におもひつめて 源も出家の素懐あると也思ひあつめて也

湖月抄

源氏  
こころにおもひつめて、

源氏物語新釈

心におもひつめて 源も出家の素懐あると也、思ひ集てなり

⑫「おほし捨てつとも、

湖月抄

源氏  
おほしすてつとも、

源氏物語新釈

おほしすてつ、も 源のわれを  
御回向の中には、

一葉抄

御ゑかうのうちには 世をすて給へるによりたる詞也

孟津抄

御ゑかうのなかには 我をもいれ給へと也 願以此功德普及於一切  
我等与衆生の心也

岷江入楚

御ゑかうのうちには 河廻向文願以此功德普及於一切我等与衆生皆  
共成仏道

湖月抄

御ゑかうのうちには、  
世をすて給へるによりたる詞也

源氏物語新釈

御ゑかうのうちに 入道の行に依ていふ

まづこそは」など、あはれになむ」など、

湖月抄

まづこそはと哀になん」など、  
五我をもいれ給へと也

源氏物語新釈

あはれになんなど 我をも入れ給はん物と覺ゆれはと也

とく、おほし立ちにしことなれど、

花鳥余情

とくおほしたちし事なれと 内侍のかみの素懐をとけ給ふこと院の

御ことに思たち給ふよしなり

弄花抄

とくおほしたちにし 源しにさまたげられ給と也

細流抄

とくおほし 朱雀院の御山こもりの時かく思立給しこと、也源のさ

またけ給しなるへし

孟津抄

とくおほしたちにし 隴のとくより思召立たれと源の御心にか、つ

らひてと也

岷江入楚

とくおほし立にし 花尚侍の素懐をとけ給ふ事院の御事に思ひたち

給ふよし也 必朱雀院の御山こもりの時かく思ひたちし事也源のさ

またけ給ひしなるへし弄

湖月抄

とくおほし 朱雀の御山こもりの時かく思ひ立ち給ひし事と也。

源のさまたげ給ひしなるべし。  
源の余情

とくおほしたちにし

この御妨げに

源氏物語新釈

この御さまたげに 源の



人<sup>④</sup>には、しかあらはし給はぬ

岷江入楚

人<sup>(1)</sup>にはしかあらはし 臚の源の出家をさまたけ給ふにはあらはさぬ

也若菜上に朱雀も此次にはいかとと、めさせ給ひしよしかけり

湖月抄

人<sup>(2)</sup>にはしかあらはし給はぬ

源氏物語新釈

人<sup>(3)</sup>にはしかあらはし給はぬ 源おほろの出家を妨給ふことはあらは

さぬと也

心<sup>(7)</sup>のうちあはれに、

源氏物語新釈

心<sup>(8)</sup>のうち哀に 臚

昔<sup>(9)</sup>よりつらき御契(り)

細流抄

むかしより 内へまいり給はぬさきよりの契と也

岷江入楚

むかしよりつらき御契 必内へ参り給はぬさきよりの契り<sup>(5)</sup>と也

湖月抄

昔<sup>(6)</sup>より 内へ参りたまはぬさきよりの契となり。

御返(り)、<sup>(10)</sup>「今は、かくしも通ふまじき御文のとちめ」

孟津抄

御返いまはかくしもかよふましき 是かとちめなるへしと臚の心也

岷江入楚

いまはかくしもかよふましき 羨尼すかたにて艶書めきてかきかは

し給はん事は有ましき事なればとちめといへり

湖月抄

いまはかくしもかよふまじき御ふみのとちめ 是<sup>(11)</sup>がとちめなる

べしと臚の心也。〔三〕尼姿にて、艶書めきてかきかはし給はん事は、

あるまじき事なれば、とちめといへり。

源氏物語新釈

いまはかくしも 尼となりては

常<sup>(12)</sup>なき世とは、身一つのみ

孟津抄

つねなき世にとは 世間は常になき物なりと也

岷江入楚

つねなき世とはわれひとり 必文ノ詞 羨これは朱雀の御事也

湖月抄

つねなき世とは 〔三〕世の常なきは、我身一ツと思ふに、おくれ

ぬると、源の仰せらるるは心得ずといふ歎。

「つねなき世とは」

源氏物語新釈

つねなき世とは 文の詞

「おくれぬ」とのたまはせたるになむ、

岷江入楚

をくれぬとの給はせたるになん 必をくれぬると也 羨世のつねな

きは我身ひとつと思ふにをくれぬると源の仰らる、は心得すといふ

賦

湖月抄

おくれぬと

源氏物語新釈

おくれぬと 〇る也

げに、

岷江入楚

けに 明石の事を思ひいて、けにといへり

あま舟にいかゞは思ひおくれけん明石の浦にいさりせし君

一葉抄

あま舟にいか、は思ひ 是もあま舟を海辺によせたり心は道心を

くれ給しを云也あかしのうらにいさりせしとハ明石上の事をふくみ

たりいさりは廻嶋と書り海辺にさすらへし事也

弄花抄

あま舟にいか、ハ 源しもあかしのうへゆへにすまへ行たまひしに

我にハなにかをくれ給ふとの給らんとよめり我ゆへのよしにハなさ

ぬ心也

細流抄

あまふねに 明石上ゆへにあかしまてはくたり給へる也我身ゆへに

てはなかりしと也

孟津抄

あま舟にいか、は思ひをくれけむ明石のうらにあさりせし君 そな

たには明石のことに付て御うつろひありたる程にこなた故におほせ

ことはいか、と也能よめる返哥也

岷江入楚

あま舟にいか、はおもひをくれけんあかしの浦にあさりせしきみ

必あかしの上ゆへに明石まではくたり給へる也我身ゆへにてはな

りし也弄 必けにあま舟にをくれ給ふましき事なるか我ゆへ明石へ

おはしたるにてはなき故にをくれ給へると也

湖月抄

あまふねに 明石上故に明石迄は下り給へる也。我身ゆゑにて

はなかりしと也。【愚案】明石の浦にいさりせし君しも躰船におく

れ給ふはいかなる事ぞと也。さて明石の上などにかかづらひて、我

に道心をおくれ給ひしにこそと心をこめたるべし。【註】明石の浦と

いふに、明石上の意はさらになし、ただ須磨の浦にといはむも、同

じこと也。

あまふねに

源氏物語新釈

あま舟に 哥のつ、け、あかしのうらにいさりせし君にて、あま舟

におくれしと侍るはいかにそやといひて、下にはかの浦の御住ひは  
明石上故にこそあれわかことにより給ふとは覺えず、然ればよのさ

ためなさも我身ひとつにそ覺えつるを、今更イマコトアツクにおくれぬるなどのた  
まはするよととかめて、且そのおくれ給ふもけに明石などの君達に  
か、つらひ給へは世と、ことわりを聞得るやうにてうらむる也

### 源氏物語玉の小櫛

歌あま船に云々九十二のひら 明石の浦といふに、明石上の意は、

さらになし、たゞ須磨の浦にといはむも、同じこと也、

② 回向には、あまねき方にても、いかゞは」とあり。

### 紫明抄

えかうにはあまねきかとも 普門示現

### 河海抄

えかうにはあまねきかともいか、はとあり 廻向文願②以此功德

普及於一切我等與衆生皆成佛道あまねき門とは普門示現の心歎ひ  
ろくあまねき廻向の心也

### 一葉抄

えかうにはあまねきかたにてもいか、ハとあり 廻向は一切衆生に

あまねくをよほす也されともいか、とハおそれは、かるとのよし也

### 細流抄

えかうには 普及於一切の心也

### 孟津抄

えかうにはあまねきかとも あまねき門かなんとは普門示現の心歎ひ

ろくあまねき廻向心也

### 岷江入楚

えかうにはあまねきかたにても 河あまねき門とありてあまねきか

と、は普門示現の心歎ひろくあまねき廻向の心也 私本二ハあま

ねきかたとあり此沙汰にのす 必普及於一切の心地也 義廻向には

あまねきかたがよけれとも男女心のかよはしし間にはいか、ととか

めたる也 聞臚はかりならず源の人にあまねく心・かくる事をいふ

歎云々 私別して臚の源へ下に通する心なくともあまねき内にはい

か、もらし奉らんといへる歎猶可決之

### 湖月抄

えかうには ② 普及於一切の心也。【愚按】これ源の詞にさがた

き御回向のうちにはとある答也。たとひ一切衆生にあまねくおよ

す回向なりとも、源氏にはいかがとなり。外にかづらふ御心あれ

ばと也。是明石上の事をかこちたる歌の心よりいへる詞也。臚の贈

答のことは、いづくにてもかくかこちたる心あり、心をつけてみる

べし。② すべて回向は、あまねく一切の衆生に及ぼす物なれば、そ

のかたにても、源氏君を、いかがはもらし奉らむ、まして年ごろの

契あればの意也。註はいみじきことがこと也。

### 源氏物語玉の小櫛

ゑかうにはあまねきかたにても云々同 すべて廻向はあまねく一切の衆生に及ぼす物なれば、そのかたにても、源氏君を、いかゞはもらし奉らむ、まして年ごろの契あればの意也、注はいみじきひがごと也、

源注余滴

ゑかうにはあまねき方にて 宣長云すべて回向は遍く一切の衆生に及ぼす物なれば其かたにても源氏君をいかゞはもらし奉らんまして年頃の契あればの意也注いみじき僻ごと也

濃き青鈍

湖月抄

こきあをにび

源氏物語新釈

こきあをにひ 地

櫛にさしたまへる、

弄花抄

しきみにさし給へる おほろ月よのてハよしといへる人也

孟津抄

しきみにさし給へる 朧の手跡はよしといへる人也

岷江入楚

しきみにさし給へる 櫛 弄おほろ月よの手はよしと也

いたく過ぐしたる筆づかひ、

一葉抄

すくしたる筆づかひ ほめたる心也

湖月抄

いたくすぐしたる

源氏物語新釈

いたくすぐしたる 風流に過たる也

なほふりがたく、

湖月抄

なほふりがたく

二條院に

孟津抄

二條院に 紫へ朧の文をはやたえたる程にとて見せ被申也

湖月抄

二條院に

源氏物語新釈

二條院に 源

女君にも、今は、むげに絶えぬることにて、

一葉抄

女君にも 朧月夜の文を紫上に見せ給也たえぬるとハ出家し給へは

也

弄花抄

女君にもいまは 朧月よの文を紫上にみせ給也たえぬるとハ出家し

給也

細流抄

たえぬること 今をとちめなれば也

岷江入楚

女君にもいまはたえぬる事 弄朧月夜の文を紫上にみせ給ふ也たえ

ぬるとは出家し給ふ事也 必今をとちめなれば也

### 38、補足資料

〔1〕①⑥

『源氏物語』「若菜上」大系③ 257～258頁

「いまは」<sup>(二九五)</sup>とて、女御・更衣たちなど、おのがじ、<sup>(宋末の)</sup>別れ給ふも、あは

れなることなん、多かりける。内侍のかむの君は、<sup>(朧月夜)</sup>故后の宮のおはしまし、

二條の宮にぞ、住み給ふ。ひめ宮の御事をおきては、<sup>(女三)</sup>こと御ことをなん、

返りみがちに、みかどもおほしたりける。「<sup>(宋末)</sup>尼になりなん」と、おほした

れど、

朱雀「かゝるきほひには、<sup>(我れを)</sup>慕ふやうに、心あわたし」

と、いさめ給ひて、<sup>(宋末)</sup>やうく、佛の御事など急がせ給ふ。

〔2〕②④

『妙法蓮華經』卷第三「化城喻品」第七、大正新脩大藏經 9 24頁

湖月抄

たえぬること ①今をとちめなれば也。②出家し給ふる也。

女君にも、いまはむげにたえぬること

源氏物語新釈

たえぬる 今は尼となりたれば、一向に源の御心も絶たること故に、

紫にも此文をみせ給ふ也

善哉見諸佛 救世之聖尊

能於三界獄 勉出諸衆生

普智天人尊 哀愍群萌類

能開甘露門 廣度於一切

於昔無量劫 空過無有佛

世尊未出時 十方常暗冥

三惡道增長 阿修羅亦盛

諸天衆轉減 死多墮惡道

不從佛聞法 常行不善時

色力及智慧 斯等皆減少

罪業因緣故 失樂及樂想

住於邪見法 不識善儀則

今以奉世尊 \*唯垂哀納受

不蒙佛所化 常墮於惡道

願以此功德 普及於一切

佛爲世間眼 久遠時乃出

我等與衆生 皆共成佛道

哀愍諸衆生 故現於世間

超出成正覺 我等甚欣慶

(第38章段担当、二年、佐藤洋平、平成五年六月十八日發表)

及餘一切衆 喜歎未曾有

(補訂者、大槻雪乃、平成二十年十二月)

我等諸宮殿 蒙光故嚴飾

39、源氏、出家した臈月夜尚侍・朝顔齋院を惜しみ、女子教育の難しさを語る。

大系三卷四〇二頁七行〜四〇四頁五行

大成二卷二〇五頁四行、別本集成九卷三九四頁二行、吉沢新訳4卷101頁、全書4卷204頁、玉上評釈7卷470頁、全集4卷253頁、今泉現代語訳6卷188頁、

集成5卷242頁、完訳6卷210頁・訳364頁、新大系3卷392頁、新編全集4卷263頁

源「いといたくこそ、はづかしめられけれ。げに、心づきなし。さまざま、心細き、世の中の有様を、よく見過ぐしつるやうなるよ。なべて世のことにてても、はかなく物を言ひかはし、時くによせて、あはれをも知り、故をも過ぐさず、よそながらの睦び、かはしつべき人は、齋院とこの君とこそは、残りありつるを。かく、みな、そむき果て、齋院はた、いみじう勤めて、まぎれなく行ひにしみ給ひにたなり。なほ、こゝらの人の有様を、聞き見る中に、ふかく思ふさまに、さすがになつかしき事の、かの人の御なずらひにだにも、あらざりけるかな。」

① 女子を生ほし立てんことよ、いと、難かるべきわざなりけり。宿世などいふらんものは、目に見えぬわざにて、親の心にまかせがたし。生ひ立たむ程の心づかひは、猶、力いるべかめり。よくこそ、あまた方々に心を亂るまじき契(り)なりけれ。年ふかくいらざりしほどは、「さうく、しのわざや、さまざまに見ましかば」となん、嘆かしき折くありし。わか宮を、心して生ほしたてまつり給へ。女御は、物の心を深く知り給ふ程ならで、かく、いとまなきまじらひをし給へば、何事も、心もとなき方にぞ、ものし給ふらん。

御子たちなむ、なほ飽くかぎり、人に點つかるまじくて、世をのどかに過ぐし給はんに、後めたかるまじき心ばせ、つけまほしきわざなりける。かぎりありて、とざまかうさまの後見まうくるたゞ人は、おのづから、それにも助けられぬるを」  
など、きこえ給へば、

紫「はかしくしきさまの御後見ならずとも、「世にながらへん限りは、見たてまつらぬやうあらじ」と思ふを。いかならん」とて、なほ、物を心細げにて、かく、心にまかせて、行ひをもとゞこほりなくし給ふ人々を、うらやましく思ひ聞え給へり。

源「かむの君に、さま變りたまへらむ装束など、まだ裁ち馴れぬほどはとぶらふべきを。袈裟などは、いかに縫ふ物ぞ。それ、せさせ給へ。一具は、六條のひんがしの君にもものしつけん。うるはしき法服だちては、うたて、見る目も、けうとかるべし。さすがに、その心ばへ見せてを」

など、きこえ給ふ。青鈍の一具を、こゝにはせさせ給ふ。作物所の人召して、忍びて、尼の御具どもの、さるべきはじめ、のたまはず。御しとね・うはむしろ・屏風・几帳などの事も、いと忍びて、わざとがましく、急がせ給ひけり。

①「いといたくこそ、はづかしめられけれ。」  
（※「此哥」は、前38章段の朧月夜尚侍の「あま舟に」の歌）

### 一葉抄

いといたくこそはづかしめられたれ 源氏の詞也よそにきかめや  
とハあれと道心はをくれ給へる事を返答にし給へははづかしめらるゝとハの給也

### 孟津抄

いといたくこそは 源の紫への詞也明石浦にあさりせしとあるは我  
をはちしめらるゝと也たえぬるとは出家にをくれぬとよみ給しこと  
をは御返事によみ給しこと也

### 弄花抄

はづかしめられ をくれけんとけんしの出家にをくれぬとよミたま  
ひし事を返事によミ給し事也

### 岷江入楚

いたくこそはづかしめ 必此哥の事也 弄をくれけんと源氏の出家  
にをくれぬるとあるを返事によみ給ひし事也

### 細流抄

はづかしめられたれ 此哥の事也

### 湖月抄

はづかしめられたれ 此歌の事也。明石の浦にいさりせしと

あるは、我をはずかしめらるると也。【愚案】系かうは普きかたにても如何はとある事にや。右の歌の上ノ句の事也。さればそれをうけて、げに心づきなしやとのたまふ也。まことに此歌の上ノ句のごとく、人におかれて、え發心もせぬ我身は、心づきなしと也。  
『五洋の舟への詠』  
「いといたくこそはづかしめられたれ。」

源氏物語新釈

はづかしめられたれ 是は源のまた世にか、つらひ居給ふを、臈のはづかしめていふ語はあらねども、此所の前後のさまをふくめて、かくはのたまひなせる也

源氏物語玉の小櫛

はづかしめられたり同 右の歌の上ノ句の事也、さればそれをうけて、げに心づきなしやとのたまふ也、まことに此歌の上ノ句のごとく、人におかれて、え發心もせぬ我身は、心づきなしと也、  
げに、心づきなし。

細流抄

けに心づきなしや 皆かやうにそむき給ては友もなしと也

岷江入楚

けに心づきなしや 必みなかやうにそむき給ひては友もなしと也

湖月抄

げに心づきなしや。  
〔四〕皆かやうにそむき給ては友もなしと也

源氏物語新釈

けに心づきなしや 皆かやうにそむき給ふに猶かくて有わか身をみつからのたまふ也

よく見過ぐし

源氏物語新釈

よく見過し 堪て克也

時くによせて、

孟津抄

時くにつきて 情をもかはしてなくさまんに臈と齋院となれば世をそむきてまませはと也

湖月抄

ときどきによせて ⑤なさけをもかはしてなくさまんには、臈と權となれど、世をそむきてまませはと也。

齋院とこの君と

岷江入楚

齋院と此君と 兼權齋院と此君は臈月夜也 必權齋院出家の事上々にてみえたり弄

湖月抄

齋院とこの君と  
〔三〕權齋院を此君は臈月夜也

源氏物語新釈

齋院と此君と 朝かほ 臈

かく、みな、そむき果て、



一葉抄

みなそむきはて、 臘月夜の事は勿論也齋院もおこなひのミにて世  
をそむくやうに過し給へはなり

細流抄

かくみなそむき 権齋院の出家こ、に見えたり

岷江入楚

かくみなそむきはて、 必齋院ほとん貞女はなかりしと也

齋院はた、いみじう勤めて、

弄花抄

齋院ハたいミしうつとめて 尼に成給ぬるよしこ、にてみゆ

孟津抄

齋院はたいみしうつとめて 尼に成給ぬるよしこ、にてみゆ

湖月抄

① 権齋院出家の誓こにて長えたり  
さい院はた、いみじうつとめて、

源氏物語新釈

さいぬんはたいみしうつとめて 権の入道し給ふ事爰にみゆ

こゝらの人の有様を、

細流抄

人のありさまを 齋院ほとん貞女はなかりしと也

岷江入楚

こゝらの人のありさま (※見出しのみ。)

② ふかく思ふさまに、さすがになつかしき事の、

弄花抄

ふかくおもふさまにさすかになつかしき事の― 権のさいるん事也

ふかくおもふさまに―権の躰なり

孟津抄

ふかく思ふさまにさすかになつかしきことの 権齋院事也ふかく思

さまにとは権躰也

岷江入楚

ふかくおもふさまにさすかに 弄権齋院の事也ふかく思ふさまに権

齋院の躰也

湖月抄

③ 孟津の躰也 ④ 齋院ほとん貞女はなかり  
ふかく思ふさまに、

源氏物語新釈

ふかくおもふさまに よろつ難なく身をつ、しみ給ふ物から、さす

⑤ かに又にくけならす物し給ふさま是に准ふへき人もなしと也

かの人の御なすらひに

一葉抄

かの人の あさかほの宮の事

細流抄

かの人の 女三宮也

孟津抄

かの人の御なすらひ 是は女三といへとも齋院たるへし前は皆女三  
とよめり

岷江入楚

かの人のなすらひ 必女三宮也 兼権臈二人 聞權也 秘秘二女三  
といへる大ニあやまれり権臈の二人といへるもわろし齋院はたいみ  
しうといふより權一人の事をほめ給ふ也

湖月抄

此のなほ権臈に子すかたにむしむ  
かの人の御なすらひに

源氏物語新釈

かの人のなすらひに 他の人は權齋院になすらふたにもなしと也  
④ 女子を生ほし立てんことよ、

孟津抄

女こをおほし 女子をそたてたてんことはかたき事と也

岷江入楚

ウシチコ  
女こおほしたてん 女子をそたてん事大事と也女三の御事の心中に  
ある故に源のさまくの給ふ也

湖月抄

女こをおふしたてんことよ ④ 女子をそだてん事大事と也。女三  
の御事の心中にある故に、源のさまさまのたまふ也。

せん女御也  
女こを

源氏物語新釈

女こをおふしたてんこと「よき」に、 女子をそたてんこと大事と也、女三  
の御事の心中にある故に源のさまくの給ふ也

④ 宿世などいふらんもの

岷江入楚

すく世などいふらん物 前世の宿因は親のま、にもならぬ事と也

湖月抄

「此の宿世の宿因は親のまにむしむ事也」  
すくせなどいふらんもの

源氏物語新釈

すくせなど 生立て後の宿縁といふものはせんかたなし

④ 生ひ立たむ程の心づかひ

孟津抄

おひた、んほどの心つかひ おひた、むまては大事なると也

湖月抄

「五つひたんまでは大事と也」  
おひたたん程のころづかひ

源氏物語新釈

おひたらんほどの はしめ

④ 力いるべかめり。

湖月抄

「親の力をいれてそだてずは也」  
ちからいるべかめり。

源氏物語新釈

ちからいるへかめり 親の

よくこそ、あまた方々に心を亂るまじき

一葉抄

あまたかた／＼に心をみたるまじき 御子のすくなきこと也

弄花抄

あまたかた／＼に 源しの心に今よりハあまた心をみたさしと也

私義アリ

孟津抄

よくこそあまたかた／＼に 源の心に今よりはあまた心をみたさし

と私義あり

岷江入楚

よくこそあまたかた／＼に 弄源氏の心に今よりはあまたに心をみ

たさしとなり 私義アリ云々 聞男女の御子のすくなき事をの給ふ

源の詞也よくこそあまた子のなけれと也 是も女三の事ゆへ也

湖月抄

よくこそあまたかたがたに ①源の詞也。よくこそあまたの子な

けれと也、是も女三の事ゆへ也。

源氏物語新釈

よくこそあまたかた／＼に よくこそ女子多からぬすくせにて有し

也、多からは中に女三のことく心をさなきも有てわか心もみたれて

なげかしと也

年ふかくいらざりし

細流抄

としふかくいらざりし 年わかき時也

岷江入楚

としふかくいらざりし 必年わかき時也

湖月抄

としふかくいらざりし

②「さう／＼しのわさや、さま／＼に

孟津抄

さう／＼しのわさや 若き時女子かすくなしと思し今はよきと也源

の心也

岷江入楚

さう／＼しのわさやさま／＼に 源の御子のすくなきをわかき時は分

別もなくてさう／＼しくおほせしと也

湖月抄

③「孟津時女子かすくなしと思ひしと也」

源氏物語新釈

さう／＼しのわさや 女子すくなしと思ひし也

④わか宮を、心して生ほしたてまつり給へ。

一葉抄

若宮を 今上の女一宮御事

弄花抄

わか宮を心して 今上の女一宮事

細流抄

わか宮を 女一宮也 紫上の養たて給也

孟津抄

わか宮を心しておほし奉り給へ 今上女一宮事也

岷江入楚

わか宮を心して 必今上の女一宮也 弄紫上の養たて給ふ也

湖月抄

わかみやを心しておふしたて奉り給へ。  
①女一宮也 ②上の養ひたて給ふ也

源氏物語新釈

わかみやを 女一宮也

心して 紫の

女御は、物の心を深く知り給ふ程ならで、

孟津抄

女御はもの、心ふかくしり玉ふほとならて 明石也

湖月抄

女御は  
①孟津抄 ②源氏物語

源氏物語新釈

女御は 明石

何事も、心もとなき

岷江入楚

何事も心もとなき 女御は御いとまなく①まだわかおはしませは心

もちいのゆきそ、かぬ事有へしと也

湖月抄

なにごとも心もとなき ②女御は御いとまなく、まだ若くおはし

ませば、心用ひの行きとどかぬ事あるべしと也。

御子たちなむ、

弄花抄

みこたちなん 惣して御子たちの事をの給

孟津抄

みこたちなん 物して御子たちのことをの玉ふ也  
③

湖月抄

みこたちなん ④惣じての御子達の事をのたまふ也。⑤女みこの

事也。

源氏物語新釈

みこたちなん すへて皇女の上をの給ふ

飽くかぎり、

一葉抄

あくかきり いさ、かもなんなくと也すへてみこたちの御ことをの

給詞也

湖月抄

あくかぎり  
⑥あくまでとの心也

源氏物語新釈

あくかきり　あくまで也

人に點つかるまじく

岷江入楚

人にてんつかるましく　弄惣してみこたちの事をの給ふ　美人に褒

貶せらるましく也

湖月抄

ひとにてんつかるまじく　〔三〕人に褒貶せらるまじく也。

後ろめたかるまじき

源氏物語新釈

うしろめたかるまじき　背目痛

心ばせ、

源氏物語新釈

心はせ　みつからの心おきてを

後見まうくるたゞ人は、

一葉抄

うしろミまうくる　人に嫁する事

弄花抄

うしろミまうくる　人に嫁する事

孟津抄

うしろみまうくるたゞ人は　凡人は嫁姫ヌは安也

湖月抄

〔五〕凡人は嫁して安き也  
うしろみまうくる

源氏物語新釈

うしろみまうくる　凡人は嫁して安きと也

それにも助けられぬるを」

岷江入楚

それにもたすけられ　弄うしろみは人に嫁する事夫にたすけられて

万はかくる、事也

湖月抄

それにもたすけられぬるを　ただ人は後見にかいしやくせらるる

を、宮達はさやうの事も自由ならずと也。

源氏物語新釈

それにもたすけられぬるを　人は嫁してそれにたすけらる、を、み

こたちはしからずしておほつかなしとなり、權はみつからの心おき

てにて終に難なく、女三は心おきてなければさることも有也

〔はか／＼しきさまの御後見ならずとも、

花鳥余情

はか／＼しきさまの御うしろみならずとも　紫上の詞なり

一葉抄

はか／＼しきさまの　紫上の語也いかならんとてとハ定なき世を思

ふ詞なるへし

細流抄

はか／＼しき 紫上の詞

孟津抄

はか／＼しき 紫の返し也

岷江入楚

はか／＼しきさまの 必紫の詞也<sup>(註)</sup>

湖月抄

〔はかばかしきさまの御うしろみならずとも、  
〔三年上の抄〕(註) 紫上のみづから事とのたまふ下の詞也。〕

源氏物語新釈

はか／＼しき 紫のこたへ

御うしろみならずとも 紫の我は

④ 見たてまつらぬやうあらじ

湖月抄

〔源氏物語〕 宮の御うしろみならずとも  
み奉らぬやうあらじ

源氏物語新釈

見たてまつらぬ 女一宮を

④ いかならん」とて、

弄花抄

いかならんとて 妙也命もしらす定なき世などをおもひ給詞なるへ

し

孟津抄

いかならんとて 紫詞也かやうにはあれとも我命を知ぬと也妙也

岷江入楚

いかならんとて 必おもしろきかき様也 弄妙也命もしらすため

なき世を思ひ給ふ詞なるへし

湖月抄

いかならんとて ⑤ かやうには思へども我命をしらぬと也。妙也。

⑥ 面白きかきさま也。

源氏物語新釈

いかならんとて かくなやましければ哀そしられぬと也

④ 物を心細げにて、

湖月抄

ものをこころほそげにて ⑦ をもじ、おだやかならず。

源氏物語玉の小櫛

ものを心ほそげにて<sup>(註)</sup> 九十四のひら をもじ、おだやかならず、

④ かく、心にまかせて、

岷江入楚

心にまかせて 聞紫の心中也 権臈などの事也

湖月抄

かく心にまかせて、  
〔抄〕 紫の心中なり 権臈などの事也

源氏物語新釈

かくこゝろにまかせて 権臈などの

「かむの君に、さま變り

細流抄

かんの君に 朧月夜也

孟津抄

かんの君に 朧へ源より装束をして参らせらるゝ也

岷江入楚

かんの君にさまかはり 必朧月也

湖月抄

「かんの君に、  
源氏物語新釈

源氏物語新釈

かんの君に 源のたまふ

④ まだ裁ち馴れぬほどは、とぶらふべきを。

一葉抄

またたちなれぬ 朧月夜の尼になり給しはしめなれは也

弄花抄

またたちなれぬ 朧月よの尼ニ成給しハしめなれハその方の女房も

また裁なれしと也

孟津抄

またたちなれぬ程はとふらふへきを 朧月の尼になり給しはしめな

れはその方の女房もまた裁なれしと也

岷江入楚

またたちなれぬ 弄朧月夜の尼になり給ひしはしめなれはそのかた

の女房もまた裁なれしと也 装束といはずして面白し

湖月抄

またたちなれぬ 朧月夜の尼になり給ひしはじめなれば、その

かたの女房もまたたち馴れまじきと也〔晧〕。

とふらふべきを。  
源氏物語新釈

源氏物語新釈

またたちなれぬ にひ尼のほとにて、そうそくなどのたちぬひもよ

ろつのも、と、のはしといふを書なしたる也

とふらふべきを 是はとふらふへきをと有けんを、下のふの字落た

る成へし

④ 袈裟などは、いかに縫ふ物ぞ。

河海抄

けさ抔は 東宮切韻云 釋氏曰袈裟二音俗云計佐天竺語也此云無垢衣又功德衣孫壇云傳法衣即沙門之服也

花鳥余情

けさなどはいかにぬふ物ぞ 昔の尼のかくるけさのぬひやうい

か、侍るやらん

孟津抄

けさなどは 昔は尼のかゝる袈裟の縫やういか、侍やらん 東宮切

韻云釈氏曰袈裟二音俗云計佐天竺語也 二云無垢衣又功德衣 孫壇三

伝法衣即沙門之服也

岷江入楚

けさなとはいかにぬふ物そ 河東宮切韻云 釈氏曰袈裟二音俗云計

佐天竺語也云无垢衣又功德衣孫壇三伝法衣即沙門之服也 花昔の尼

のかくるけさぬひやういか、侍るらん

六條のひんがしの君に

細流抄

六条の東の君 花散里也

孟津抄

六条の東の君 花ちる里也

岷江入楚

六条院のひんかしの君 必花ちる里なり

湖月抄

六條のひんがしの君 〔花ちる里也〕

源氏物語新釈

六條のひんかしの君に 花散里

ものしつけん。

湖月抄

ものしつけん あつらへつけん也

うるはしき法服だちては、

紫明抄

ほうふくたちては 法服

河海抄

うるはしきほうふくたちて 法服立

細流抄

のりふくたちて あまりに世をそむきたるやうにはすましきと也

孟津抄

ほうふくたちては くすみてはと也

岷江入楚

ほうふくたちては 河法服立 私立ノ字如何 ヌクト 必あまりに世を

そむきたるやうにはすましき也 〔也〕

湖月抄

ほうふくたちては ①あまりに世をそむきたるやうにはすましき

也。②くすみてはと也。

③さすがに、その心ばへ見せてを」

湖月抄

④さすがにそのころばへみせてを」 あまりにりつとくもさすがに法服きて河に給へと也

源氏物語新釈

さすかにその心はへ あまりけうとくもなくさすかに法服めきて調

し給へと也

⑤青鈍の一具

孟津抄

あをにひ一くたり 是は衣裳の事也



湖月抄

至五は衣袋の中也  
あをにびのひとくたり

こゝには

湖月抄

紫にて也  
ここには

源氏物語新釈

こゝには 紫

④ 作物所の人召して、

河海抄

つくもところの人めして 作物所

一葉抄

つくも所 金銀の細工の所なるへしあかの具などの事也

弄花抄

つくも所 金銀細工の所なるへし調度のため也

細流抄

つくも所 金銀の細工の所なるへし調度のため也

孟津抄

つくも所の人めして 細工などするもの也作物所也金銀細工の所な

るへし調度のためなり是は御手道具也爰を三段に分てみるへし 法

服 衣裳 手道具 此三也

眠江入卷

つくもところの人 河作物所 必金銀細工の所なるへし調度のため

也弄 篋尼の具は悉くろぬり白かな物にてまきゑなしと云々

湖月抄

つくもどころ ④金銀細工の所なるべし、調度のため也。【三】尼

の具は悉く黒ぬり白かな物にて蒔繪なし云云。⑤是は御手道具な

り。爰を三段に分けて見るべし。法服、衣裳、手道具此三也。

源注拾遺

つくもどころの人めして 今案作物所

源氏物語新釈

作物所つくも所 こゝにては調度共をせさせ給ふ也、或説に尼の具は黒ぬ

りに白かな物にてまき繪はせずといへり、又爰は法服と常の衣と調

度と三つ也といへり

④ 尼の御具どもの、さるべきはじめ、のたまはず。

湖月抄

あまの御ぐどものさるべきはじめのたまはず 尼の御道具どもの可

し然をはじめ仰せつくる也。

源氏物語新釈

さるべきはじめ 日數へて出来へき物なれば始といふか、猶考へし

④ 御しとね・うはむしろ・屏風・几帳など

弄花抄

御しともねうはむしろひやう風木丁 うはむしろ如何

孟津抄

御しとねうはむしろ屏風さちやうなど うはむしろ如何かやうの事

まで御心にいれ給也

岷江入楚

御しとねうはむしろ屏風木丁 弄うはむしろ如何

湖月抄

御しとねうはむしろ 弄うはむしろ如何。かやうの事まで御心に

いれ給ふにや。●うはむしろ、むかしいかやうの物も用意ある事に

こそ。

39、補足資料

(1) ③⑤

『東宮切韻』、『大漢和辞典』大修館書店、卷六 179頁

『東宮切韻』[東トウグク] 書名。二十卷。菅原是善撰。中國の十三家の切韻

を集めて一家の見解を述べたもの。其の東宮といふは、蓋し春宮學士であつた時の奉敕撰であるからであらう。今、散佚して傳本無く、岡井慎吾博士、佚文百四十五字を集めて切韻拾存を作る。

上田正『切韻逸文の研究』汲古書院 昭和五十九年 516頁～517頁

東宮切韻 20卷 菅原是善(八八〇薨)撰

その内容は、切韻所収の各字について、陸法言・曹憲・郭知玄・釈氏・長

源氏物語新釈

御しとねうはむしろ 龍鬢のうはむしろも定りて有へき物也、雜要

抄に圖有、或説にうたかふはいかにそや

いと忍びて、

源氏物語新釈

いとしのひて かの御名立し君の事なれば

わざとがましく、

岷江入楚

わざとかましく 弄これはあなたに御用意なき間にといそき給ふ也

孫訥言・韓知十・武玄之・薛岫・麻泉・王仁煦・祝尚丘・孫恂・孫仙・沙門清徹の十四書の文をこの順序に写し、その後「今案」として訓義を補足し、小韻首字の場合は最後に同音字数を記している。同字でも韻の異なる場合は別に挙げ、陸法言にない字や音は別に挙げ、諸書の中に同訓又は類訓のあるものは適宜にそのうちの一つを選び他は省略している。上記のうち曹憲のみは切韻でなく『桂苑珠叢抄』であり、今案の部分は平安朝に存したわが国人撰述の上元本玉篇系の字書を用いている。

(※補足)

伝本が散逸しているため、当該箇所本文は確認できなかつたが、『源

氏物語』の古注釈書に散見する「東宮切韻」については、いくつか指摘がなされている。岡田希雄は「東宮切韻攷」(『立命館文学』第二巻第五号、昭和十年三月)、「東宮切韻佚文攷」(『立命館文学』第二巻第十一号昭和十一年三月、同九月補)を発表し、特に後者において『原中最秘鈔』『河海抄』の名を挙げる。特に『河海抄』『末摘花』巻の『東宮切韻』について「誤写があるのか知らぬが、何のため東宮切韻を引いて居るのか判りかねる引方である。孫引の所へ誤写も生じたのだらう。河海抄には三三六頁にも東宮切韻を引いて居るが和名抄の孫引である。」とも述べる。「孫引である」との指摘も看過できないものと考ええる。

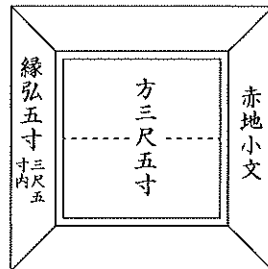
(2) ④

【類聚雜要抄】卷四、群書類従第26輯雜部 595頁

表延三枚。各一枚。  
表延、東平六年七月三日花山院内大臣院御所用之  
 今案、大正三年七月廿一日兼二件御石大校御所用之各目同前也

弘并長各中敷寸法同前也。縁弘三寸。四方廻差之。青地小文。唐錦。裏濃打物。

唐錦茵一枚。裏濃打物。



龍鬚地鋪一枚。

凡弘三尺六寸。用事見「指圖」。



(第39章段担当、二年、大竹弘美、平成五年六月二十五日発表)

(補訂者、大槻雪乃、平成二十年十二月)